

セッション3

新しいいのちの福音

社会の中で信仰によって生きる

フィリス・クロスビー著

© Phyllis Crosby 2009

新しいいのちの福音

目的

新しいいのちとしての福音の希望と、そのいのちをどのように生きるかについて理解する。

目次

はじめに

第1章 新しいいのち(人生)の活力
聖霊に満たされた生活

第2章 新しいいのち(人生)の方向性
神がこの世においてどのように働かれるかを理解する
十字架の道を受け入れる

第3章 新しいいのち(人生)の領域
この世の「中に」生きつつ、この世の「ものとならない」

第4章 新しいいのち(人生)の範囲
霊的な鍛錬を実践する

推薦図書

Five Smooth Stones, Tom Nelson

The Divine Conspiracy, Dallas Willard

はじめに

養子になったばかりの子の生活は、孤児から家族の一員になるときに、劇的に、またほとんど一瞬のうちに変わります。その変化はその子の現在の状況だけでなく、人生全体の軌跡にも影響を及ぼします。

養子とされた子どもたちは、孤児のままだった場合の状況から引き離され、新しく、それまでとは全く異なるところへと導かれます。その子たちは新しい家族の一員として生きていくだけではなく、国際的な養子縁組の場合、瞬間的に国籍が変わり、文化的にも全く変えられてしまいます。

これは、私たちが養子となることを通してどのような関係へと導かれていくかについて、その一端を示してくれます。イエス様は十字架に架かることを通して、私たちが神の家族の一員となることを法的に可能にしてくださいました。私たちの国籍は暗やみの支配から、神の御子が支配される御国へと移され、御国の価値観を抱くことを通して新しい文化をも得ます。私たちがイエス様を信じるとき、神は私たちに様々な仕方に関わってくださいますが、神が私たちを「わが子」と呼び、私たちが神を「アバ、父」と呼ぶときほど、個人的で親密な関係を持つことはありません。

クリスチャンになったとき、あなたは単に新しい宗教を信じたものではありません。あなたは、全宇宙を支配される神に応答したのです。その方は目に見えない現実の中で、あなたが神の家族、神の世界、神のみこころに加わるようにと、あなたの心の扉をたたき、招いてくださいました。神はご自身の働き、ご計画、そして、ともに御国を支配するようにとあなたを招いておられます。あなたが本来意図された人となるように呼び求め続け、神があなたを愛しておられるように、あなたが神を深く愛するようにと招いておられるのです。

イエス様の招きは、新しいいのち、また新しい生活を提供することが、その土台となっています。イエス様が提供してくださるものを正しく理解するなら、あなたの生活はこれまでとは全く異なったものとなることに気づくでしょう。神があなたのいのちをご自身のいのちへと方向を転換される中で、神はあなたの人生の目的、価値観、原動力、自己認識、世界観、またそれ以外のさらに多くの事柄を変え、整えてくださいます。

オズ・ギネスは「召命(The Call)」の中でこのように書いています。「…神は決定的に私たちをご自身のもとへと召される。それゆえ、私たちのあり方、行い、所有物のすべては、神への招きへの応答と奉仕のために、特別な献身と力を伴うものとしてささげられるのである。」¹

私たちの信仰は私たちの生活そのものを変化させます。この新しい人生について、単に神学的に理解するだけでは十分ではありません。それが何であり、どのように生きるべきかを知る必要があります。この論文では、私たちのキリストにある新しい人生の性質について、また私たちを取り巻くこの世において、その新しい人生をどのように生きることができるかについて見ていきます。

イエス様を信じたときのことを思い起こしてください。あなたは何を望んでいましたか。もしかしたら、すぐに目に見えるもの、あなたの人生を変える何かを与えられると期待したかもしれません。多くの人々は、イエス様の福音は天国への希望をもたらすのみで、この地上におけるより良い生活を期待しても決して実現しないと感じているかもしれません。クリスチャン生活にひどく失望し、自分のうちにある深い探究心を満たすものを他のところに求める人たちもいます。

私たちに約束されている新しいいのち(人生)とは何でしょうか。そして、それをどのように生きることができるのでしょうか。人生の意味を発見するために、いのち(人生)(life)や生きる(live)という言葉の定義を見ていきましょう。

アメリカ・ヘリテッジ英語辞典によると、いのち(人生)や生きるという概念には4つの要素があります。それらは「活力」、「方向性」、「領域」、「範囲」です。

1. いのち(人生)とは活力、あるいは動力の源である。いのちには「活力」、あるいは動力源がある。
2. 生きるとは、特定の仕方での人の存在を存続させること。私たちのいのちには「方向性」がある。
3. 生きるとは特定の場所に住むこと。私たちの生活はある「領域」の中でなされる。
4. いのち(人生)とは誕生から死までの期間のこと。いのち(人生)には「範囲」がある。

私たちのキリストとともに歩むいのちの多くは、奥義に包まれています。イエス様は私たちをご自身のもとに引き寄せ続け、私たちがやめたくなくても、私たちを決して離しません。イエス様のみこころに従う、長く、しばしば痛みの伴う旅路は単純な方程式にまとめることはできません。ある人は試練の中を通りながら深い喜びを知り、他の人は同じ試練を通して苦々しい思いに至るのはなぜでしょうか。ある人はより豊かな人生を体験し、他の人は不満を抱き、信仰から離れていきます。ある人は新しい人生のうちを歩み、他の人は単に生き延びているだけです。

私たちに与えられている新しいいのち(人生)についてよりよく理解するために、私たちの存在を示す4つの要素、つまり「活力(あるいは動力)」、「方向性」、「領域」、「範囲」について見ていきましょう。

「はじめに」のまとめ

- ・クリスチャンになったとき、あなたは単に新しい宗教を信じたのではない。
- ・イエス様は新しい人生、新しい生活を提供することに基づいて、私たちを召しておられる。
- ・神が私たちの人生をご自身のいのちへと方向転換されるとき、私たちの人生の目的、価値観、動力源、自己認識、世界観、またそれ以外のさらに多くの事柄を変え、整えてくださる。

第1章 新しいいのち(人生)の活力

辞書には、いのちとは「活力、あるいは動力の源である」と定義されています。生命維持装置につながっている患者には、いのちの力がありません。その患者は完全に生きていたとは言えません。活力、また動力がないからです。イエス様が私たちに新しいいのちを吹き込んでくださる以前、私たちは生命維持装置につながっている人に似ている状態でした。しかし、キリストが霊的に死んでいた私たちに新しいいのちを与えられたとき、私たちは本当に生きたものとされました。イエス様ご自身が私たちの活力、また動力となられたのです。イエス様が私たちのいのちであり、私たちの人生は力を受け、永遠に存在されるイエス様をもとに整えられています。私たちの新しい人生は、イエス様のいのちという新しい活力を持っているのです。

A.W.トーマスの福音の定義は、私たちがどのようないのちを受け取ったかについて洞察を与えてくれます。「新約聖書の最終的なメッセージの全容はこれである。イエス様の贖いの血潮を通して、今、罪深い人間は神と一つになることができる。神のご性質が人間のうちに住まわれるのである！」² 神のご性質が人間のうちに住まわれる。つまり、神が人々のうちに生きておられるのです！私たちの新しいいのちは、私たちのうちに生きておられるイエス様ご自身です。神の御国は確かに私たちのただ中にあるのです。それは、キリストが「私たちのうちにとどまられる」とき、キリストは「絶えずはっきりと臨在しておられる」からです。

パウロはコロサイ人への手紙で、キリストが私たちのうちに宿っておられるという事実を、福音の核心的な本質として述べています。コロサイ 1:25-27 にこう書かれています。「私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。神のことばを余すところなく伝えるためです。これは、多くの世代にわたって隠されていて、いま神の聖徒たちに現された奥義なのです。神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」また、コロサイ 3:15-16 でパウロはこのことについて、私たちの心を支配するキリストの平和、私たちのうちに宿っておられるキリストのみことばとして述べています。

私たちは、イエス様なしにいのちを持つことができません。「そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。」1 ヨハネ 5:11-13

私たちのうちにあるイエス様のいのちは、行動、つまり動力を伴うものです。永遠のいのちは私たちのからだ、思い、感情、意志と分離したものではありません。イエス様は、私たちの本当の現実、実際に今存在している私たちの、そのような領域すべてに関わっておられます。私たちの霊的ないのちは、私たちのからだを通して表されます。それらを分離することはできません。つまり、永遠のいのちは単に霊的な領域だけでなく、物理的な領域においても現実のものであるのです。私たちの物理的なからだは、消費する食べ物や水から力を受けます。しかし、イエス様は私たちがパンのみで生きていける者ではないことをはっきりと示されました。私たちはこの物理的な世界においても、イエス様から食物を得ることが必要なのです(ヨハネ 6:27-28、ヨハネ 4:13-15、マタイ 4:4、ヨハネ 6:54-59)。

聖霊が私たちの死ぬべきからだにいのちを与えてくださることを示しているローマ 8:9-11 について考えてみましょう。「けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。もしキリストがあなたがたのうちに住んでおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。」

私たちの新しいいのちの力、また動力は、私たちの肉体のうちに生きておられるイエス様の永遠のいのちであり、この新しいいのちは物理的な世界において、私たちの肉体を通して表されるのです。イエス様は新しい人生の目標であり、またその目標に到達するための方法でもあります。ガラテヤ 2:20 にこう書かれています。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子に信じる信仰によっているのです。」私たちの新しいいのち(人生)は、まさしくキリスト中心であり、キリストのうちにあり、キリストを通して表され、キリストのためにあるのです。それはキリストによって、またキリストのゆえに与えられているのです。

新しいいのち(人生)は、ある程度、神の奥義であると言えます。しかし神は、私たちがイエス様のいのちを通して、今日、永遠のいのちを得ることができるように十分な情報を与えてくださっています。では、どのようにしたらこのいのち(人生)を生きることができるのでしょうか。それは、イエス様に対する「信仰」と「服従」を通して、私たちの活力である「聖霊に満たされる」ことによってできるのです。

信仰はクリスチャン生活における受動的な感情ではありません。信仰は「行動」をもたらします。神が良いお方であると信じるなら、私たちはその通りに「行動」します。神の愛、恵み、裁き、また美を求める思いを理解するなら、私たちはそれにふさわしく「行動」するように促されます。自分の信じていることが真実であると考え、「行動」することこそ信仰なのです。イエス様を信じる時、私たちは自分の知っていることが真実であると考え、それにしたがって「行動」します。私たちはイエス様がみことばを通して示される価値観や原則にしたがって生きるのです。^a

私たちは、この新しいのち(人生)を墮落した世において生きていて、墮落した自己から完全に解放されているのではないということを理解する必要があります。私たちの墮落した性質はなおも存在し、罪はキリストにある私たちのいのちと信仰を揺さ振ります。罪は私たちが神を体験することを妨げます。罪が私たちのからだと思いを支配するとき、キリストはそれらを支配することができません。その結果、私たちは罪の影響を知り、しばしば、悲しみのうちに変わりたいと深く願うようになります。そのような自己評価はとても良い影響をもたらすことがあります。それを通して神は私たちに語るができるようになります。神が変化の過程に介入され、私たちを変えてくださるのです。

変革をもたらす生活: 信仰によって行動することは、変革をもたらす生活のリズムをもたらします。このリズムは私たちに変革をもたらし、他の人々や社会を変革するイエス様の働きのために私たちを用いていただけるように導きます。しかし、罪の痛みと私たち自身の忍耐のなさのゆえに、私たちはこの過程を歪めてしまう可能性を大いに持っています。私たちは変革の過程を歩み続けるよりも、完全な状態に到達することのほうが大切であると、どういうわけか理由づけしてしまうのです。私たちは変革の過程を歩むときにイエス様の働きをするのであり、完全な状態に達するなら働きをすることができないということを忘れてしまうのです。

神のご性質か代替物か: 「不安定でイライラする振り子の状態」 最近、自分の生活について考えたとき、私は自分が経験している敗北や失敗のゆえにとても失望しました。私はまるで、ある時は神を追及することをあきらめ、ある時は神を追及するという振り子のような状態を永遠に続けていくのかと感じました。問題は、私が神を追及するとき、神は私をあまり満たしてくれないと感じ、あきらめたくなり、自分を満たしてくれる代替物に目を向けてしまうことでした。

私はもはや、変革をもたらす生活を生きているのではなかったのです。私は神のために神を追及しているのではなかったのです。私は、実は神のご性質を追及していました。神ご自身、あるいはイエス様が私に与えてくださった新しいのちよりも、神の平安、義、力を求めていたのです。

神がそのご性質をすぐに与えてくださらなかったとき、私はすぐに自分を満たしてくれる代替物を見つけました。神の義によって私を満たしてくださらないとき(そして、そのことを私は感謝していますが)、私は自分の想像力によって自分の欲しいものを得ようとしてしました。すぐに満たしてくれる食物を得られるのに、なぜ神の平安を待ち望むべきか、と考えてしまうのです。もちろん、そのような代替物が間違っただけであることを私はすぐに理解しました。そして悔い改めようとしてしますが、私の悔い改めは私を正しいところに導いてくれません。本当の神にではなく、「私の」神のもとへ導いてしまうのです。私の本性を示す「神」、つまり、楽な生活を送るべきであるという思いへと導くのです。私が神のご性質と代替物との間を揺れ動いてしまう理由は簡単です。神のご性質を求めることは正しいようで正しくなく、代替物を求めることは、はっきりと間違っているのです。

^a Vine's Expository Dictionary of Biblical Words (c) 1985, Thomas Nelson Publishers によると、聖書的な信仰は絶えず神に基づくものであり、確信、従順、行いをもたらします。ローマ 1:5、2テサロニケ 2:11-12、ヨハネ 1:12、2コリント 5:7 参照

神が私のためにして下さることにではなく、神のために神を追及することによって満たされるということを理解したとき、私は大きな慰めを得ました。しかしそのためには、大きな痛みを伴う、神に対する深い服従が必要でした。私の人生において神の約束をこのように成就してください、と神に語ることをあきらめなくてはなりません。また、私の人生をこのように導いてください、と神に語ることもあきらめる必要がありました。

私たちは正直なところ、キリストは私たちの人生を変えてくださることができると信じたので、キリストのもとに来たということを認める必要があります。では、キリストはどのように私たちを変えられるのでしょうか。また、私たちが変えられることや成長することを偶像とせず、純粋にキリストを追及するにはどうしたらよいのでしょうか。そのような変革のリズムに私たちはどのように入ることができるのでしょうか。

みことばの中で最も混乱させられる概念の一つは、自制が御霊の実である、ということです。自制ということばは、私が自分をコントロールするということを示唆します。しかし、なんらかの仕方、神の御霊がコントロールする力を私に与えてくださるのです。ですから、だれがコントロールするのでしょうか。御霊でしょうか、私でしょうか。この聖書的な概念を理解することは、私たちが変革の過程を進むにはどうしたらよいかを知るための土台となります。

もし自制が神から与えられるものであるなら、私たちは神が何かをしてくださることを、私たちを劇的に変えてくださることを待ち望むべきでしょうか。神が私たちの願いを変え、私たちがいつも正しいことを追い求め、完全に自己鍛錬できる者となることを期待すべきでしょうか。悲しいことに、神はそのような仕方では働かれないようです。では反対に、私たちは主からの助けを全く期待せずに、自己鍛錬をする新しい道を歩み始めるべきでしょうか。私たちは「だれがコントロールするのか」という質問を絶えず問いかけるのです。変革における私たちの役割とは、そして神の役割とは何でしょうか？

自由をもたらす洞察: 自制は御霊の実なので、私たちの意志の力をどんなに働かせても私たちは自分を変えることはできません！ 私たちの意志の力では、自分を変えることができないのです。自制は御霊の実です。自己鍛錬のできない人について考えてみましょう。その人に必要なものは何ですか。自制です。鍛錬です。その人に必要なのは、意志のなさを克服するための意志です。しかし、意志に欠けている人のうちから意志や自制を生み出さなければならないなら、これは決して解くことのできないパズルになってしまいます！ですから、私たちの意志では私たちを変えることはできず、ただ神の御霊のみが私たちを変えてくださるのです。しかし、私たちを良い者に、正しい者にしてくださいと、受動的に神を待ち望むのでは、何も起こりそうにありません。ですから、私たちは自分の意志を奮起させたり、自分の責任を放棄したりせずに、神の御霊に服従することによって、変革の旅路を出発するのです。そうすることによって、私たちは自分の役割を果たし、御霊にも御霊の役割を果たしていただきます。

このことは、すべての御霊の実についても当てはまります。ガラテヤ 5:22-24 にこう書かれています。「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。」悲しんでいる人が喜ぼうと決意したり、忍耐のない人が突然忍耐深くなったりするのでしょうか。そのようなことは、喜ぶことや忍耐することを決意するのではなく、私たち自身をイエス・キリストに「服従させる」ことによって、もたらされるのです。

「服従する」ことは、あきらめたり、神が簡単に変えてくださることを期待したりすることではありません。服従は受動的ではなく、能動的なものです。それは一瞬一瞬、意識的に、自分の願い、考え、そして行いをイエス・キリストご自身

に従わせることです。服従するときこそ、私たちは「今、ここで、私の願いではなく、あなたのみこころを行ってください」と言うことになるのです。私たちが服従する御霊は、ご自身の願うように働かれます。私たちが自分の願いに対して死ぬとき、キリストのために生きることができます。私たちが服従するとき経験する葛藤は、ゲツセマネの園におけるイエス様と比べることができます。実際、私たちが自分の園にいる限り、人間として苦しんでくださった私たちの主のもとに決して近づくことはできません。

私たちに対して過ちを犯した人を赦すのがどれほど難しいかについて考えてみましょう。痛みと怒りのゆえに、私たちは自分を正当化したり、償いを求めたりするという強い願いを抱きます。復讐したいと思うこともあります。私たちの被った過ちが深刻なものであれば、そのような願いも正当化されるように思えます。ですから、どんなに意志の力を働かせても、赦すことはできないのです。赦そうと努力しようとすればするほど、絶対に赦すことができないように思えます。しかし、自分を理解してもらいたい、謝ってもらいたい、償ってもらいたいという権利を放棄するとき、イエス様は私たちのうちにある痛みや怒りを取り扱い、本当に赦すことができるように助けてくださいます。これは魔法ではありません。痛みがいつもすぐになくなるわけではありません。しかし私たちは信仰によって、兄弟に対するこの罪を抱き続けるという権利を放棄すると宣言するのです。

服従を最もはっきりと表す方法の一つは、罪の告白です。しばしばクリスチャンは自分の罪をどのように扱ったらよいかわからないと思うことがあります。信仰において、私たちの罪に対する解決の方法はただ一つしかありません。それは、告白、悔い改め、償いの過程を歩むことです。これらはすべて服従を表すものです。

服従には、罪の告白(私の願いではなく)と、キリストとの同意(あなたのみこころがなりますように)の両面があります。私たちはすぐにキリストに同意する、つまり従うことによって罪を避けます。どちらにせよ、服従はイエス様への真の従順を示します。そうすることによって、特に私たちが自分のやり方でありたいと思うときに、私たちの心、言葉、行いよりも、イエス様の方法が優先されます。私たちは信仰によってイエス様に服従し、それを通して、自制を含む御霊の実が私たちの品性において成長し、実を結びます。しかし、この実は聖霊のうちに深く根付いています。このように絶えず告白と服従を繰り返すことによって、私たちは聖霊の力のうちを妨げられることなく歩むことができるのです。

第1章:新しいいのち(人生)の活力

まとめ:

- イエス様のいのちは私たちの新しいいのち(人生)の活力であり、それゆえ私たちの新しいいのち(人生)は、まさしくキリスト中心である。
- 私たちはイエス様への「信仰(信頼)」と「服従」を通して、聖霊に満たされることによって、新しい人生を生きることができる。
- 信仰はクリスチャン生活における受動的な感情ではない。信仰は「行動」をもたらす。
- 服従とは、一瞬一瞬、意識的に、自分の願い、考え、行いをイエス・キリストご自身に従わせることである。
- 私たちは意志の力によってではなく、神の御霊に服従することによって変えられる。
- 絶えず告白と服従を繰り返すことによって、私たちは聖霊の力のうちを妨げられることなく歩むことができる。

第2章 キリストにある新しい人生の方向性

私は20代のはじめ、まだクリスチャンになったばかりの頃に、初めて福音書を読みました。イエス様について最初に印象に残ったことは、イエス様はすべて内側から外側へ、あるいは反対のことを語っているということでした。イエス様は先の者が後になる、あるいは生きるために死ぬ必要があると語られます。また私はもう片方の頬を向け、敵を愛するべきであると言われます。イエス様は私たちの直観とは反対のことを言われることがあり、最初のうち私はイエス様の方向性が全く分かりませんでした。

辞書によれば「生きる」とは、「特定の仕方でその人の存在(いのち)を存続させること」という意味も含まれています。例えば、ある人が僧侶として、あるいは儒教の規範に従って生きたとします。ここに示されているのは、その人のいのち(人生)の方向性です。特定の規範や仕方ですべて生きていくなら、それが私たちのいのち(人生)に方向性を与えます。私たちに与えられた新しいいのちは、私たちを整え直し、新しい方向を与えます。それは、今、私たちはこの世の原則に沿ってではなく、神の御国の原則にしたがって生きようになったからです。私たちは新しい考え方、新しい行い方を身に着けたのです。私たちは神の御国の市民となり、御国の文化に適合しているのです。もし御国における「特定の仕方」で生きることには失敗するならば、私たちは永遠のいのちを生きていることにはなりません。それではやがて天国に行って、約束されているそのようないのちを体験することができるかもしれませんが、今日、ここで生きることのできる永遠のいのちの約束をすべて見失ってしまうこととなります。

パウロは1テモテ 6:11で、テモテに御国の原則によって整え直され、新しく方向づけられたいのち(人生)を積極的に追及するように勧めています。「しかし、神の人よ。あなたは、これらのことを避け、正しさ、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を熱心に求めなさい。」そして、パウロはどのようにすればよいか12節で説明しています。「信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはこのために召され、...」

私たちのいのち(人生)が御国の原則にしたがって整え直され、新しく方向づけられるとき、私たちの価値観も変えられます。私たちの道徳観や倫理観は、神が天地を創造されたときに打ち立てられた生活のあり方に修復され、今、与えられているいのちを通して、私たちの良心が回復します。このように「神の方法にしたがって修復される」ことによって、ずさんな道徳観が入り込む余地がなくなります。

永遠のいのちを生きるには、この世の王国のただ中であって、神の御国の価値観にしたがって生きることが必要です。職場において、あなたの生き方に反する状況に直面することが多々あるでしょう。そのようなチャレンジに直面しながら、きよい良心を保つには、神の知恵、恵み、力が必要です。「信仰と正しい良心を保つ」(1テモテ 1:18)ことは、信仰の戦いを勇敢に戦うことの一部です。そうするには、イエス様が私たちに求めておられることと、私たちを取り巻くこの世の王国にいる人々が私たちに求めることの両方を理解する必要があります。

新しい方向に向かって生きることは、一度ですべて完成するのではなく、継続的なものです。私たちが神についての知識や理解において成長するにつれ、神は私たちが御子に似た者となるように、整え、変えられ、新しい方向へと導き

しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいます。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。(1ヨハネ 5:20)

続けてくださいます。ですから、神の御国における方向性をすべて説明することはできません。この論文では、私たちに正しい方向を示し、一度理解したなら巧みに生きていくことができるように助けてくれる御国の二つの原則について見ていきます。それは「神がこの世においてどのように働かれるかを理解する」と、「十字架の道を受け入れる」とです。

神がこの世においてどのように働かれるかを理解する

最近、私は友人とともに、あるミニストリーに関わっていました。私たちが願っていたほど物事はうまく進まず、友人は失望し始めました。私たちの計画がことごとく進まないように見えたとき、彼女はよくこのように言いました。それはまた、私がしばしば自問することでもあります。「なぜ神様は魔法の杖を使ってこうしてくれないのかしら。」

このような問いは、私たちが生きているこの世界に対する誤解から生じます。この世界がどのように機能するように神が造られたか、神の歴史においてまた御国のストーリーの中で私たちの果たすべき役割にどのような意味があるのかといったことを、私たちはいつも理解しているわけではありません。私たちはクリスチャンになると、どういふわけか物理的な宇宙から離れ、それよりもより高い、より良い、より霊的なものに向かっていてと考えてしまうのです。

新しい方向性: 神はこの物理的な宇宙を私たちのために造られ、また神は私たちをそこから取り上げようとはされません。私たちは物理的な宇宙の中に住んでいて、実際に治めるべき領域が与えられています。これは信じられない特権であり、驚くべき責任です。私に与えられている大きな特権を無視することによって、私は時々、信仰ではなく怠慢から生じる祈りの態度を抱くことがあります。私は私のために神に支配してもらおうとするのです。与えられた領域を治めるために私に授けた特権や責任を取り除く代わりに、神は「私のために」ではなく、「私を通して」物事を（それがどのようなことであっても）行うことを選ばれるのです。私たちが神のかたちに造られた者であることを示す、私たちに与えられている領域は神に従い、神のためにささげられるのですが、私たちによって管理されているのです。

神の創造における秩序に対する誤解は、しばしば、有害な二元論を生み出します。神は私たちの「行い(doing)」よりも「あり方(being)」に関心を持っておられる、という言葉聞いたことがあるでしょう。このような教えは、私たちは行いから離れても霊的になることができるという考え方を示しています。このような間違った二元論は、思索的な生活か、行動的な生活かのどちらかへと導きますが、思索的な行動へと導くことはほとんどありません。私たちは「行い」から離れてどのように「存在」することができるでしょうか。そのようなことは思い巡らすだけでも愚かなことに思えます。行いとあり方を分離することができないのです。

私たちの新しいいのち(人生)の本質について考えてみましょう。新しいいのち(人生)は何によって成り立っているのでしょうか。本質的に言えば、私たちの新しいいのち(人生)は、イエス様が贖いをもたらすために働いておられる、ということです。私たちは回復に向かって歩み、私たちの行いは人々に回復をもたらします。私たちの行動、つまり「doing」は、私たちの存在、つまり「being」から流れ出ているのです。統合されたいのちとは、二分化されていないのちです。私たちの行いは私たちのことばと一致し、それは私たちの信仰と一致するのです。霊的な人は御国という新しい方向性にしがって行動し、生きています。統合されたいのちには、偽善の余地はありません。私たちはキリストご自身が聖であるように聖とされること(つまり、私たちが「doing」ととらえていること)なしに、霊的になる(つまり、私たちが「being」としてとらえていること)ことはできないのです。

マタイ15:16-20において、イエス様はこの真理について弟子たちにこう方向づけしています。「あなたがたも、まだわからないのですか。口に入る物はみな、腹に入り、かわやに捨てられることを知らないのですか。しかし、口から出るも

のは、心から出て来ます。それは人を汚します。悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。これらは、人を汚すものです。しかし、洗わない手で食べることは人を汚しません。」

神が私たちの生活の霊的な側面だけに関心を持っていると考えるなら、私たちは神が創造された秩序を誤解してしまいます。物理的な宇宙についてふさわしく受け止めないなら、神がこの世において私たちのうちに、また私たちを通してどのように働こうと意図されているかを理解することは困難です。そうすると、私たちは物理的な世界から離れて存在することができるという間違っただけの考えを持ち、行いとあり方とを区別する間違っただけの二元論を築いてしまいがちになります。

十字架の道を受け入れる

私はクリスチャンになって間もなくの頃、イエス様が十字架で死なれたことによって私はそうしなくてもいいのだ、という考え方に感動しました。その後、信仰において成長し、イエス様のことを知るようになるにつれ、イエス様が十字架で死なれたのは、まさしく私もイエス様とともにそこで死ぬためであった、ということを理解しました。ディートリッヒ・ボンヘッファーの有名な言葉はまさしく真実です。「キリストが人を召すとき、その人に、来て死になさいと告げているのである」³ 御国への道は、十字架の道なのです。

新しい方向性: 痛みや苦しきは「破壊的」にもなれば、「贖いをもたらす」ことや「変革をもたらす」こともできます。しかし、痛みや苦しきは避けて通ることができません。

イエス様の生涯は、死、復活、そして昇天によって完了しました。イエス様はゲツセマネの園から十字架へと移動されたのです。そして、葬られ、死から復活し、天に昇られました。十字架の道を受け入れるとき、私たちはイエス様が通られた様々な段階におけるイエス様の態度や行いを身に着け、変革のサイクルを歩むことができます。私たちの生活においてしばしば繰り返されるこのサイクルは、私たちに贖いと変革をもたらした、イエス様の歩まれた十字架の道に並行するものです。

ゲツセマネの園において、イエス様は「服従」を体験されました

十字架において、イエス様は「恥」と「苦難」を体験されました

墓において、イエス様は「死」を体験されました

復活を通して、イエス様は「変えられました」

昇天の後、イエス様は「変革をもたらす」方となりました

十字架の道は、私たちに歩むようにとイエス様が召しておられる現実のサイクルです。私たちの十字架はイエス様の十字架とは様々な面で、特に私たちの罪を取り除くことができないという点で、異なります。しかし、イエス様の十字架によく似たものでもあるのです。

イエス様ご自身がどのように痛みを通るべきかを私たちに示しておられます。1ペテロ 2:21-25 にこう書かれています。「あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために痛みを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。あなたがたは、羊のようにさまよって

ましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。」

私たちが負うべき十字架についてより良く理解するために、イエス様の十字架について考えてみましょう。

イエス様の十字架は不当なものでした。イエス様が苦しまれたのは、自分の罪のためではありませんでした。真の十字架は不当なものです。私たちが自分の罪のために苦しむなら、それは私たちを戒めるためです。神はそのような痛みを用いて私たちを悔い改めに導くかもしれませんが、それは私たちが負うべき十字架とは異なります。1 ペテロ 2:19-20 にこう書かれています。「人がもし、不当な苦しみを受けながらも、神の前における良心のゆえに、悲しみをこらえるなら、それは喜ばれることです。罪を犯したために打ちたたかれて、それを耐え忍んだからといって、何の誉れになるでしょう。けれども、善を行っていて苦しみを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは、神に喜ばれることです。」

イエス様の十字架は他の人たちのためでした。イエス様が自分のために死なれたのではなかったように、私たちもただ自分のためにのみ変革のサイクルを歩むではありません。もちろん変革の過程を通して私たちも益を得ますが、しばしば私たちは、自分に過ちを犯した人も含む他の人たちのために苦しむように召されます。クリスチャンにとって死ぬことは赦すことに似ています。これは自分に与えられている権利である、と感じていることに対して死ぬのです。それは他の人に対してののしらず、まただれかにののしられても脅さないことを選ぶことなのです。

イエス様の十字架は自発的でした。変革するには、何かを選択することが大切です。避けられない状況のゆえに苦しむことは、それだけでは十字架ではありません。だれもがみな苦しみます。私たちの十字架には、イエス様の十字架と同じように、それを選び取ることが含まれます。私たちは何について苦しむではなく、どのように苦しむかについてしか選ぶことができないかもしれませんが、それでもイエス様のように苦しむことを選ぶとき、私たちは自発的に苦しむことになるのです。

イエス様の十字架は贖いをもたらすものでした。イエス様の苦難と死には目的がありました。まさにルカ 9:51 に書かれているとおりです。「さて、天に上げられる日が近づいて来たころ、イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐに向けられ(た)」。イエス様の苦難は、やがてすべての苦難を取り除きます。イエス様の死によって私たちは生きるのです。私たちは十字架で取られ、そして復活によって宣言された驚くべき勝利についてほんの一部しか知ることができませんが、やがて私たちはそれを完全に経験することになります。私たちが負うようにと召されている十字架も、贖いをもたらすものの一つです。私たちが苦しむのは、他の人々がイエス様をより体験することができるようになるためです。

なぜ十字架は魅力的なのでしょう。ヘブル 12:1-4 こう書かれています。「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。」

イエス様はご自分の前に置かれた喜びのゆえに十字架を忍ばれました。私が本当に十字架を負い、自分に死ぬことを選んだとき、正直に言えば、少なくとも表面的には目に見える喜びは全くありませんでした。しかし、主のみこころにゆだねたとき、主は私を変えてくださいました。そのことのゆえに私は喜びます。私たちがイエス様の死においてイエス様に似た者となるとき、イエス様のいのちにおいても似た者とされるのです。ローマ 6:5 にこう書かれています。「もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じよう

になるからです。」私たちのことを召してくださった方がどのような方であるかを知り、その方の目を見るなら、私たちはイエス様が苦しまれたように、自分も苦しむことを喜びとします。もがいたり、葛藤したりするかもしれませんが、私たちを愛してくださっている方を否定することはできないのです。

変革へのサイクル:

服従:「新しいいのち(人生)の活力」のところで、服従について述べました。これは十字架への道の出発点です。それは絶えず、服従することを選ぶことから始まります。

恥と苦難: ディートリッヒ・ボンヘッファーはあるときこう言いました。「赦しとは苦難の一つの形である。」以下の話はこの真理を示しています。

私のことを傷つけた友人のために祈っていたときのことを思い出します。私はこの人が有害なことをする傾向があるので、彼女が贖われることができるように、神に触れていただき、新しいいのちを与えてくださるように祈っていました。そして、いつもこのように祈って終えていました。「もし彼女を変えてくださらないのなら、どうか彼女の影響力を取り除いてください。」

この人は、基本的に私が悲しむようなことをし続けていました。私は神が彼女を贖ってくださることを願うとともに、彼女の行いから影響を受けることがないようになりたと思っていました。それは私には理にかなったことに思えました。しかし、そのように祈っていたとき、イエス様が私の名前を呼んでいるように強く感じました。私は十字架にかかった主の目を見るかのように、顔を上げました。「あなたの友人の代わりに、私のもとに来て、ともに苦難を負いなさい。私の贖いに条件をつけてはならない。それが本当の赦しだ。」私は恐れあまりたじろぎました。「いいえ、私は死にたくありません」と私は答えました。赦しを選ぶことは私にとって本当に苦しいことでした。しかし、主に従うことを決意したとき、本当に赦すことができるいようになり、私が心から求めていたいのちに満ちあふれました。

赦しは私たちが十字架への道を歩むときに直面する唯一の苦難ではありませんが、それはイエス様が罪人たちの手の中で経験された苦難を最もよく示すものです。

ローマ 8:16-17 にこう書かれています。「私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人でもあります。」

死: 服従と苦難は、私たちを死へと導きます。苦難の原因がどのようなものであれ、私たちが信頼しているイエス様以外のものを手放すときに、死が訪れます。それは、私たちの心のうちにある、自分のいのちと存在意義の源となってしまっているものを取り除く過程です。死とともに、平安と安息が与えられます。

ローマ 6:2-4 にこう書かれています。「罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。それとも、あなた方は知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。」

変えられた: この過程を通して、イエス様がご自分のいのちを私たちを通してより完全に表してくださいます。私たちは変えられていきます。

ローマ 6:5-10 にこう書かれています。「もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活と同じようになるからです。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。死んでしまった者は、罪から解放されているのです。

もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。」

変革をもたらす: 一度変えられたなら、私たちは変革をもたらす者となります。私たちに過ちを犯した人とどのように関わるかということにおいて変えられるなら、私たちは本当にその人を愛し、赦すことができます。また、他の人たちが苦難に会うとき、彼らとの関わりにおいても変革をもたらします。

エペソ 2:6-7 にこう書かれています。「(神は)キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかに示しになるためでした。」

ローマ 8:11 にこう書かれています。「もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。」

変革のサイクル

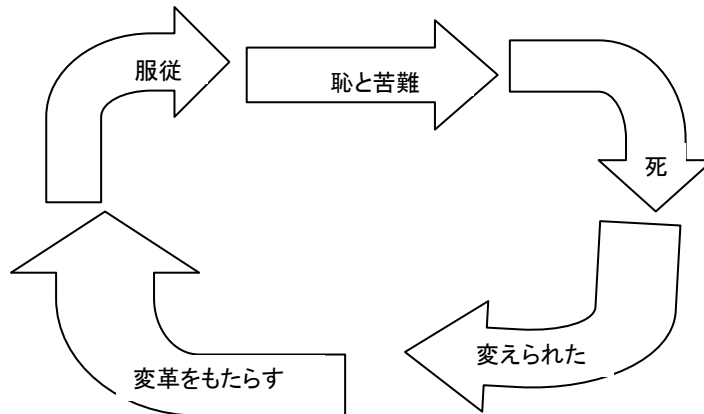
ヘブル 2:10-11

「神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであつたのです。聖とする方も、聖とされる者たちも、すべて元は一つです。それで、主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで...」

ピリピ 3:7-14

「しかし、私にとって得であつたこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくと考えています。それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分は

すでに捕らえたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を旨ざして一心に走っているのです。」



第2章 新しい人生(いのち)の方向性

まとめ:

- 私たちに与えられた新しいいのちは私たちを整え直し、新しい方向を与える。それは、私たちがこの世の原則に沿ってではなく、神の御国の原則にしたがって生きようになったからである。
- 新しい方向性: 神はこの物理的な宇宙を私たちのために造られ、また神は私たちをそこから取り上げようとはされない。
- 新しい方向性: 痛みや苦しきは「破壊的」にもなれば、「贖いをもたらす」ことや「変革をもたらす」こともできる。痛みは避けることができない。
- 十字架の道は、私たちに歩むようにとイエス様が召しておられる現実のサイクルである。

第3章 キリストにある新しい人生(いのち)の領域

「生きる」という言葉の同義語の一つは「住む」です。つまり、特定の場所に、ある期間、あるいは永続的に生活することです。住むという言葉のこの側面は、私たちの領域に関するものです。新し人生(いのち)とともに、神の愛する御子、キリストの御国という領域ももたらされました。「神は、私たちを暗やみの圧政から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。」(コロサイ 1:13-14)

ダラス・ウィラードは御国における生活について次のように説明しています。「御国は現在活動していて、イエス様とともに、またイエス様を通してもたらされている。それがイエス様の福音である。... この御国は今「受け入れ」、後で楽しむものではなく、今、中に入るべきものである(マタイ 5:20、ヨハネ 3:3、5)。すでに実在の市民がいる(ヨハネ 18:36、ピリピ 3:20)。彼らはその中に入れられ(コロサイ 1:13)、その中における同労者なのである(コロサイ 4:11)。」⁴

今自然に浮かんでくる質問は、神の御国は私たちが生活しているこの世とどのように関わっているのか、ということです。イエス様は御国のこの世との関係について、この世の「中に」あるが、この世「のもの」ではないと語っておられ

ます。

「さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。『神の国は人の目で認められるようにして来るものではありません。「そら、ここにある」とか、「あそこにある」とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。』」(ルカ 17:20-21)

「イエスは答えられた。『わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったなら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように、戦ったことでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません。』」(ヨハネ 18:36-37)

私たちに与えられた新しいのち(人生)の領域は、今存在し、私たちにもたらされている神の御国です。それは今、「この世の中に」ありますが、「この世のものではない」のです。そして、神の御国がこの世にありつつ、この世のものではないように、私たちもこの世にありながら、この世のものではない者として生きるべきなのです。御国がこの世の「中」にありつつ、この世の「ものではない」ことによって、御国は永遠の存在でありつつ、今存在するものでもあるのです。

この世の「中に」あって、この世の「ものではない」という概念は、クリスチャン生活において非常に重要な原則です。これはとても重要な原則ですが、しばしば注目されないために、多くのクリスチャンは自分の周囲のこの世の人々に対して影響力を及ぼすことができていません。この世と一体化し過ぎてしまうか、あるいはこの世から離れ、この世のシステムの外に身を置いてしまうか、してしまうからです。ヨハネ 17 章を読むと、この原則についてより多くのことを発見することができます。イエス様はゲツセマネの園へ向かう途中、立ち止まり、十二弟子のためだけでなく、彼らのあかしを通してイエス様を信じるすべての人々のために祈られました。この箇所は、主が私たちにとって重要であると思われることについて、洞察を与えてくれます。

イエス様が弟子たちのために祈られた最後の祈りを、これから読んでいきましょう。

<p>ヨハネ 17 章</p> <p>イエスはこれらのことを話してから、目を天に向けて、言われた。「父よ。時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現わすために、子の栄光を現わしてください。それは子が、あなたからいただいたすべての者に、永遠のいのちを与えるため、あなたは、すべての人を支配する権威を子にお与えになったからです。その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現わしました。今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。わたしは、あなたが世から取り出してわたしに下さった人々に、あなたの御名を明らかにしました。彼らはあなたのものであって、あなたは彼らをわたしに下さいました。彼らはあなたのみ</p>	<p>観察:</p> <p>-永遠のいのちは神を知ることによって見出すことができる。</p> <p>-私たちは父がイエス様に与えられた者たちであり、この世から取り出された存在である。</p>
--	--

ことばを守りました。いま彼らは、あなたがわたしに下さったものはみな、あなたから出ていることを知っています。それは、あなたがわたしに下さったみことばを、わたしが彼らに与えたからです。彼らはそれを受け入れ、わたしがあなたから出て来たことを確かに知り、また、あなたがわたしを遣わされたことを信じました。わたしは彼らのためにお願いします。世のためではなく、あなたがわたしに下さった者たちのためにです。なぜなら彼らはあなたのものだからです。わたしのものはみなあなたのもの、あなたのものはわたしのものです。そして、わたしは彼らによって栄光を受けました。わたしはもう世にいません。彼らは世にいますが、わたしはあなたのみもとにまいります。聖なる父。あなたがわたしに下さっているあなたの御名の中に、彼らを保ってください。それはわたしたちと同様に、彼らがつとなるためです。わたしは彼らと一つにいたとき、あなたがわたしに下さっている御名の中に彼らを保ち、また守りました。彼らのうちだれも滅びた者はなく、ただ滅びの子が滅びました。それは、聖書が成就するためです。わたしは今ももとにまいります。わたしは彼らの中でわたしの喜びが全うされるために、世にあってこれらのことを話しているのです。わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。彼らをこの世から取り去ってくださるようというのではなく、悪い者から守ってくださるようお願いします。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではありません。真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。わたしは、彼らのため、わたし自身を聖め別ちます。彼ら自身も真理によって聖め別れるためです。わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします（イエス様はあなたのために祈っておられます！）。それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らもみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。またわたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです。わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたことを、この世が知るためです。父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしと一つにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。正しい父よ。この世はあなたを知りません。しかし、わたしはあなたを知っています。また、この人々は、あなたがわたしを遣わされたことを知りました。そして、わたしは彼らにあなたの御名を知らせました。また、これからも知らせます。それは、あなたがわたしを愛してくださったその愛が彼らの中にあり、またわたしが彼らの中にいるためです。」

-イエス様はこの世におられたが今はおられない。イエス様は私たちがなおもこの世にいるという事実をとて意識しておられ、私たちが守られるように祈られた。この世で生きることが危険であることを知っておられた。

-イエス様はこの世のものではなく、私たちももはやこの世の者ではない。そのため、この世と私たちとの間に一致しないことが起こる。

-イエス様は私たちがこの世から取り去られるようにと祈られたのではない。イエス様は私たちがこの世の中にいることを望んでおられる。この世は天国に行くまでの一時的な保管所ではない。さらにイエス様は、ご自分がこの世に遣わされたように、私たちも遣わしたと言われた。私たちは目的をもってこの世に遣わされている。

-私たちがこの世に遣わされているのは、世がイエス様を信じるためである。これは、この世を肯定的に考えていることを示している。

-イエス様は私たちがイエス様をはっきりと知ることを望んでおられる。イエス様は私たちを求めておられる。

-イエス様は神をこの世に知らせるという働きを今も続けておられる。

「この世の中にあり、この世のものではない」とはどういう意味でしょうか。もしかするとより重要な質問は、それが意味しないものとは何か、ということかもしれません。「中に」という言葉は場所を示すものです。御国はこの世界の中、物理的な宇宙の中、王である神を知らない人たちも含む人々の中にあります。御国は永遠に存在するので物理的な宇宙の中に限られているわけではありません。しかし御国はこの宇宙をも含んでいる、というのは重要な点です。

「この世のもの」あるいは「この世のものではない」とは、私たちが住んでいる国において、その権威の源となっている組織的な原則を示すものです。今日の宇宙において、2つの王国が存在します。一つは墮落した原則にしたがって動いている墮落した王国であり、もう一つは神の原則にしたがって動いているキリストの王国、つまり御国です。神の御国はこの世と同じ原則にしたがって築かれているではありません。「バーンのメモ」によれば、イエス様がご自分の国はこの世のものではないと言われたとき、「それは、地上の王国と同じ性質のものではない。同じ目的によって生まれたのでもなければ、同じ計画に基づいて運営されているのでもない」⁵と言われたのです。

イエス様はこの世の中に生きること、この世のものではないということとの緊張関係を意識的に作られたのです。イエス様は御国がこの世の中にあるように、私たちもこの世の中にあって生きようと言われました。つまり、私たちは社会の人々や組織から遠く離れてではなく、社会の中に深く関わる必要があります。人々の文化の中に入り込むことなしに、人々と関わることはできません。しかし、私たちはこの世のものとなるべきではなく、墮落したこの世の原則とは一線を画し、異なった生き方をし、社会のシステムに影響されることなく、こちらから影響を与えるべきなのです。私たちは墮落した文化のただ中であって御国の文化にしたがって生きるべきなのです。

パウロはコリントの教会に対して、同じ事柄を取り上げています。1コリント5:9-13にこう書かれています。「私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者と全然交際しないようにという意味ではありません。もしそうだとしたら、この世界から出て行かなければならないでしょう。私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で、しかも不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけない、いっしょに食事をしてもいけない、ということです。外部の人たちをさばくことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。外部の人たちは、神がおさばきになります。**その悪い人をあなたがたの中から除きなさい。**」

ソロモン王はこの緊張関係について次のように説明しています。「私はこのむなしい人生において、すべての事を見てきた。正しい人が正しいのに滅び、悪者が悪いのに長生きすることがある。あなたは正しすぎてもならない。知恵がありすぎてもならない。なぜあなたは自分を滅ぼそうとするのか。悪すぎてもいけない。愚かすぎてもいけない。自分の時が来ないのに、なぜ死のうとするのか。一つをつかみ、もう一つを手放さないがよい。神を恐れる者は、この両方を会得している。」(伝道者の書 7:15-18)

この世の中にあって、この世のものではない者として生きるという概念を表すのに、宣教学者たちは「宣教的な」という言葉を使います。宣教的であるためには、教会、もしくは個人は自分を取り巻く世に対して、部外者ではなく、部内者として関わる必要があります。宣教的であるとは、伝道的であると同時に、さらに多くのことを意味します。ティム・ケ

ラーは宣教的な教会の5つ要素について述べています。これらはクリスチャン個人にも当てはまるものです。6

1 宣教的な人たちは、自分たちが置かれている地域や状況で使われている特有の言葉話す

私たちの言葉や話し方は、私たちがどのような者であるかを定義し、社会における位置を示します。私たちは言葉の使い方によって人々を受け入れたり、排除したり、関わったり、追放したり、興味を引き付けたり、傷つけたりします。そのため、宣教的な人たちは注意深く言葉を選び、教会の専門用語を避け、必要なときは教会の友人に対してさえ、宗教的な言葉の意味を説明します。彼らはいつも未信者がともにいるかのように話をします。部内者として語るために「私たち対彼ら」という対決的な言葉を使いません。もしそうするなら、未信者の人々を不必要に遠ざけてしまうからです。私たちが謙遜さと喜びをもって文化と関わろうとするなら、私たちの言葉は、たとえ私たちの考え方に強く反対する人々に対しても、優しく、考慮する価値のあるものとなるのです。

2 宣教的な人たちは文化の中に入り、その文化が大切にしている物語を福音とともに表す

宣教的な人たちは、ある文化における文学、音楽、演劇に興味を示し、深く精通することによってその文化に入ります。文化の中に入るには、その文化における希望や夢を理解し、英雄的な物語やその文化が強調していることを知る必要があります。その文化の物語(ストーリー)をまず知った上で、その文化が追い求めていることはキリストによってのみ実現する、ということを示す必要があるのです。

3 宣教的な人たちは社会における生活と職業において訓練されている

宣教的な人たちは、社会における生活、つまり職場と地域社会での生活における未信者の価値観に対して、どのように関わればよいか訓練されていて、対応できます。彼らはクリスチャンとして考え、クリスチャンとしての特徴を保ちながら働くことができます。文化におけるどの部分は受け入れ、どの部分は拒否し、どの部分は適応したり、改善したりすべきかを理解しています。宣教的な人たちは、彼らと大きく異なった生活をしている人々に、福音を用いて、真の聖書的な愛を示します。

4 宣教的な人たちは文化に反する、あるいは未信者の人々の直観と相容れない、クリスチャンの共同体を作る

宣教的な人たちは、共同体において単に建て上げ合う関係を築くだけでなく、文化に反する生き方を具現化します。クリスチャンたちが、特にセックス、金銭、権力について、どれほど異なる考え方を持っているかをこの世に示します。宣教的であるには、あわれみの行いや社会正義のための行動と、伝道の両方を、献身的に実践することが必要です。

5 宣教的な人たちはできる限りクリスチャンの一致を保つ

宣教的な人たちは彼らの考えや行いと異なる他のクリスチャンたちを疎外したり、裁いたりしません。他の教会やクリスチャンたちを非難せず、御国のために協力することを求めます。

なぜ、この世の中に生きつつ、この世のものとならないことが難しいことなのでしょう。ヨハネ 17 章のイエス様の祈りの中で、イエス様はどのような危険があると言われたのでしょうか。これらの問いは、私たちが御国において、御国のために巧みに生きるためにとっても大切なことです。それは、**イエス様が備えられた緊張関係を適度に保つことができないなら、宣教的になることは不可能**だからです。この世の中に生きつつ、この世のものとならないという適度に保つことを妨げる要因が少なくとも二つあります。

私たちはこの世から分離し、宣教的になることを拒む場合があります。 第一に、社会と関わることによって汚されるという間違った恐れゆえに、私たちは周囲の人々や文化的な組織から安全な距離を置き、「この世の中に生きること」と、「この世のものとなること」の両方を拒むことがあります。これは、聖さとはこの世から分離することであるという誤った考え方をすると、起こります。クリスチャンの交わりの中にも、墮落した社会の問題に手を染めることを拒むのです。人々にイエス様について語り、彼らをこの世から連れ出すことには意欲的ですが、この世の中に生き、社会の問題を解決することはしたがない、あるいはそうすることができないのです。

この世の中に生きることを拒むとき、私たちは絶えず律法主義と高慢に陥る危険に身をさらすことになります。この世から分離するためには、自分たちがどのようにしているかを示すための数多くの規則を必要とし、それが律法主義につながります。この世的と思われることに不注意にも陥ることがないようにするために、厳密な境界線を引く必要があります。律法主義は、しばしば霊的な高慢と結びついています。自分がいかにきよいか、周りの人たちより良い生き方をする力があるか、自慢してしまうのです。このような致命的な組み合わせにより、私たちは主に拠り頼むのではなく、自分の力に頼ることになります。そのため、私たちは福音を伝えようとしている人々に対して厳しく接し、さばくようになります。社会に対して福音による解決をもたらす代わりに、私たちの福音は社会の必要と関わりのないものとなってしまいます。キリストの甘い香りを放つ代わりに、未信者の人たちにとって近寄りたくない存在になってしまいます。

私たちは宣教的になれないほどにこの世と一体化する場合があります。 第二に、自分はきよさを保ち、この世によって汚れることはないというふさわしくない自信を抱くために、この世と必要以上に一体化し、「この世の中に生きること」と「この世のものとなること(この世にしたがって生きること)」の両方をしてしまうことがあります。この世と必要以上に一体化することは、しばしば、この世と関わりを持ちたいという願いか、この世の人々から拒絶されたくないという恐れから生じます。どちらの場合においても、正しいことと間違ったことを区別することを嫌います。人々を不機嫌にさせたくないからです。この世の中に生きることを拒む人のようにこの世をさばくのではなく、この世と必要以上に一体化する人はこの世のシステムにしたがって生き、見極める力がなく、しばしば妥協してしまいます。

人々を不機嫌にしたいくないという思いは、頭から悪いとは言えません。しかし、この世と必要以上に一体化する人は、いのちをもたらす言葉、つまり愛と真理の両方が含まれている言葉を語る代わりに、妥協という簡単な道を選んでしまうのです。

適度な緊張関係を保つための安全策：イエス様とともに歩み、御国の働きを効果的に行い続けることを助けてくれる、いくつかの安全策があります。

安全策1:この世を福音の光に照らしながら見ることを学ぶ

光を照らす福音: C.S.ルイスは、ある晴れた日に暗い物置小屋の中に入ったときのことを書いています。その小屋に入ってくる光は、屋根に空いた小さな穴から入ってくる光だけでした。その光があっても小屋は少しも明るくならなかったため、ルイスはその光をよく見ることにしました。上から差し込んでくる強い光によって彼が見ることができたものは、小屋の中に舞う無数のほこりだけでした。好奇心にかられたルイスは、「光を見る」代わりに、光が差し込んでくるところの近くから「光とともに見下ろす」ことにしました。すると、ルイスは光と協力しながら、小屋全体をはっきりと見ることができました。⁷

ルイスは後に、この出来事は、私たちが生活しているこの世を最もよく理解するために福音の光をどのように用いるべきかを比喩したものであると思い巡らしました。私たちは福音の光を見るべきです(聖書の学び、聖書を読むことを通して)が、福音の光を通してこの世についてはっきりと理解することができるように、どのように物事を福音の光とともに見るかについても知る必要があります。ですから、クリスチャンは片手に聖書を、もう一つの手で新聞を持つときに、最もよく物事を理解することができると言われているのです。

福音の光に照らしながらこの世を理解するには、福音を理解し、この世を理解する必要があります。この世において効果的に生きるには、イエス様が何を求めておられるかを理解するとともに、私たちの周りにいるこの世のシステムにしたがって生きている人々が何を求めているかも理解する必要があります。両方を理解することによって、私たちはふさわしく行動することができます。

「御国のストーリー」は福音の光とともにこの世をはっきりと理解するための枠組みをもたらします。それは「創造(Creation)」、「墮落(Fall)」、「贖い(Redemption)」、「回復/完成(Consummation)」という枠組み(CFRC)です。この世を福音の光とともに理解し、より聖書に忠実な決断をするために、この枠組みをどのように用いればよいか考えてみましょう。聖書に忠実で健全な世界観は、私たち自身と、私たちが生きるこの世を最もよく理解することを助けてくれます。生活のあらゆる領域において、クリスチャンらしく考えることを助けてくれます。

この世について理解する上で、はっきりと考えることを妨げる 2 つの間違ったパターンがあります。ある人は原則に基づいて考えることが苦手なため、権威を大切にすることを強調し過ぎる傾向があります。その人は聖書に書かれているすべての状況における具体的で、少しも疑いようのない答えを探そうとします。もちろん、具体的な答えが見つからないときに、それを作ろうとする誘惑があります。このような人にとって、聖書は生きたことばではなく、厳格な規則を集めたものとなってしまいます。

また、あることは絶対的に正しい、という考え方をするのが苦手な人もいます。そのような人は権威を大切にすることを軽んじる傾向があります。その人にとって、聖書はガイドラインを軽く示しているものにすぎないので、自分自身を最終的な権威としてしまいます。聖書は弱々しい霊的な格言をまとめたものに過ぎず、いのちの力をもってはいないことになってしまいます。

たいてい、子どもたちは原則に基づいて考えるのが苦手です。彼らは変わることがなく、厳格で、すぐに適用できる規則を求めます。最近、娘からある質問を受けました。それは彼女が規則を欲していることを示すものでした。彼女はぶどう酒を飲むことは間違っていると考えることは正しいかどうか、私に質問しました。私は親として、彼女が福音の光

によってこの世を理解する能力を高めることができるように助けたいと思いました。彼女の質問に「はい」や「いいえ」で答えることはとても簡単なことです。しかし、どちらの答えも、彼女がアルコールを飲むことについてクリスチャンとしてどのように考えるべきかを助けることにはならないのです。

私はその代わりに「創造・墮落・贖い・回復(CFRC)」の枠組みを用いて、聖書により忠実な仕方での世を見ることができるよう助けました。アルコールは何を意図したものか、なぜ造られたのか、また礼拝のため、交わりのため、心を豊かにするためなど、アルコールの良い使い方について見ていきました。申命記 14:26 で神の臨在を喜ぶために、ぶどう酒だけでなく、さらに強い酒が用いられたことに、彼女は特に驚きました。しかし、私たちの墮落した世においてアルコールがどのように悪用されているかについても考える必要がありました。アルコール依存、飲酒運転など、罪がもたらす心痛む悪影響について取り上げました。アルコールは「本来どうあるべきか(原状)」「(創造)」「現状はどうか」(墮落)について見た後、「どのようになる可能性があるか」(贖いを通して)について考えました。イエス様は聖餐を祝うにあたり、ぶどう酒を用いられました。イエス様が私たちを聖霊によって満たすとき、私たちはアルコールを本来あるべき仕方を用いることができます。そして究極的には、歴史が完成するとき、もはやぶどう酒が悪用されることはありません。

「創造・墮落・贖い・回復(CFRC)」という枠組みを用いてこの世を理解することによって、アルコールは悪いものであるという間違った考え方ではなく、アルコールを悪用することは悪いことであるという、より聖書に忠実な考え方に、会話を導くことができました。どのような状況においても福音の光を照らして見ることを学ぶとき、この枠組みは物事を決断する上で、生活のあらゆる領域において助けになります。

安全策2: 神への愛、謙遜、健全な良心を育む

神への愛において成長するとき、人々に受け入れてもらうために正しいことを妥協する、ということが困難になります。私たちの主との愛の関係は、人生の目的、あるいは最終的な目標であるとともに、目標に向かって進むための方法でもあります。この関係があれば、私たちの周りのこの世に対して、さばき過ぎたり、受け入れ過ぎたりすることから守られます。主に対するこの愛のゆえに、失敗するかもしれない状況においても大胆であることができます。

謙遜は不可欠です。それによって、この世から分離したいという誘惑をもたらす律法主義や高慢の罪から守られます。また、この世のシステムに汚されることはないという誤った自信を持つことから守られます。ふさわしい謙遜は、神ご自身と交わるときを通して、ただ神から与えられるものです。

健全な良心は何が正しく、何が間違っているかを示し、間違ったことをしようとするときに反応します。健全な良心を保つには、間違ったことではなく正しいことを選び、間違ったことをしたときには悔い改める必要があります。良心が語ることにに対して無視するなら、あなたの良心は干からびていってしまいます。

安全策3: この世の中に生きつつ、この世のものではないという宣教的な生き方を求めている人たちと共同体を築く

神が私たちに共同体として生きるように召しておられる多くの理由の一つは、私たちが恐れることなく適切にリスクを取ることができるようにするためです。ふさわしい共同体の中で生きるとき、確かなことが二つあります。一つは、御

国の原則にしたがって生きて行こうとすることができます。第二に、私たちが間違ったり、神が意図されていることから外れてしまったりしたとき、正しいところに立ち返らせてくれる、しっかりとした関係があるということです。それによって、自分の信仰の幅をどこまで伸ばすことができるか、自由に探究することができます。

安全策4: 自分の繁栄のためではなく、他の人々のために、また私たちが生きている社会のために仕えるとき、この世のシステムに陥る可能性は低くなる

この安全策は、私たちは社会に仕えるときに、社会が提供してくれるものを強奪することはできない、という原則に基づいています。真のクリスチアンの奉仕には、謙遜と、私たちが神に信頼することによる神への説明責任（アカウントビリティ）が求められます。ですから、神に基づいた奉仕は、私たちの貪欲、競争心、自分を高めようとする行いなどを取り除きます。真に仕えるとき、私たちはこの世の考え方に迎合しないので、この世の価値観に陥ることなく、この世の中に生きることができます。

結論:

イエス様がこの世に遣わされたように、私たちもこの世に遣わされています。私たちは目的のある使命を果たすために遣わされていて、より良いところに、また私たちが造られた本来の姿に到達するまで機会を用いるべきです。私たちを通して贖われていない被造物はイエス様を知り、信じるようになります（ヨハネ 17:21）。しかし、御国における責任を効果的に果たすために、この世を支配する原則にとらわれることなく、この世の中に生き、文化に浸透し、人々と関わることを喜んで選び、そうすることができるようになる必要があります。

第3章 新しいいのち（人生）の領域

まとめ:

- 永遠のいのちは今から始まるものであり、死んだ後に入るものではない。
- 神の御国は私たちの住むこの世の「中に」存在しつつ、この世の「ものではない」ことを通して、この世と関わる。
- この世の「中に」生きつつ、この世の「ものではない」という緊張関係を保つことができないなら、私たちは宣教的になることを拒んでこの世から分離するか、この世と一体化して宣教的になれなくなる。
- ふさわしい緊張関係を保つために4つの安全策がある。
 - ・この世を福音の光に照らしながら見ることを学ぶ
 - ・神への愛、謙遜、健全な良心を育む
 - ・この世の中に生きつつ、この世のものではないという宣教的な生き方を求めている人たちと共同体を築く
 - ・自分の繁栄のためではなく、他の人々のために、また私たちが生きている社会のために仕える

第4章 キリストにある新しいいのち(人生)の範囲

今、永遠のいのちを生きる

辞書によれば「いのち(人生)」とは「誕生、あるいは受胎から死までの期間」のことを指します。8 この定義はとてもしっかりしています。いのちとは、私たちが生まれたときから死ぬときまでに起こることです。ですから、イエス様は私たちに永遠のいのちを約束されていますが、いったいイエス様は私たちに具体的にどのようなものを提供しておられるのでしょうか。多くの人たちにとっては、永遠のいのちは単純に天国を意味します。ですから、イエス様がもたらされるものは死んだ後にのみ有効であるかのように思えます。しかし、この辞書の定義をもとに永遠のいのちを見てみましょう。もしいのちとは誕生と死との間に起こることであるなら、永遠のいのちは霊的な誕生とともに始まり、終わることがありません。つまり、**私たちは今日、永遠のいのちを生きているのです**。私たちの新しいいのちは、永遠という新しい範囲を持ったものなのです。

永遠のいのち、あるいは永遠に生きるとは、次の世ではなく、今の世において始まるものです。私たちは今、ここで生きているのと同じいのちを天国でも生きるのです。私たちのいのちは永遠に延長されています。つまり、私たちの天国におけるいのちは現在のいのちの延長なのです。永遠のいのちとは、天国というような場所ではありません。それは生き方なのです。

黙示録には私たちが今日していること、「行い」、「正しい行い」が、永遠についてくることを示しています。私たちは将来なるであろう者へと、今、変えられているのです。「また私は、天からこう言っている声を聞いた。『書きしるせ。[今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである。]』御霊も言われる。『しかり。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行いは彼らについて行くからである。』」(黙示録 14:13)

また、黙示録 19:7-9 にこう書かれています。「『私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意ができたのだから。花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。』御使いは私に『小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ、と書きなさい』と言い、また、『これは神の真実のことばです』と言った。」

私たちに与えられた新しいいのちは永遠という範囲に及ぶので、私たちの今の世における行いは、現在と将来とにおいて、永遠の意義を持っています。イエス様は、今日、私たちが永遠のいのちを生き始めることを求めておられます。しかし、私たちは墮落したため、本来意図されたいのち(人生)を生きることができなくなっています。すべてのクリスチャンがある緊張を体験しています。つまり、私たちは生きることが不可能な、あるいはとても難しいいのち(人生)を生きようと造られたのです。パウロはローマ 7:15 でこの緊張について次のように嘆いています。「私には自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。」

この緊張は私たちの個人的な聖さだけでなく、この社会において信仰を働かせることにも影響を及ぼします。トム・ネルソンは「5つのなめらかな石(Five Smooth Stones)」で、私たちの社会における生活と個人的な霊性についてこう述べています。「私たちが自分たちの文化に対して効果的に戦うことができているように見えるのは、自分のたましいのうちに起こる戦いに対して勝利していないことと直接関係している。」9

今の世において私たちが抱く緊張は「今とまだ」という、きよめの過程から生じるものです。きよめとは、聖なる目的のために聖別されることですが、聖くされる、あるいは清くされるという意味でもあります。神がご自身の愛と赦しによって私たちの人生に介入されるとき、神のすばらしい目的のために私たちを聖別されます。同時に、私たちを清くし始めてくださいます。これが、きよめの「今」の側面です。しかし、私たちは主と顔と顔を合わせて栄光のうちにお会いす

るまで、墮落した世において墮落した者として生き続けます。これが信仰における「まだ」の側面です。神はあえて私たちを今の世から取り除いたり、回心のときに一瞬にして完全な者にしたりはしないのです。これは間違いではなく、神が意識的になさることなのです。しかしそのため、私たちはたましいのうちに激しい戦いが起きているかのように感じ、なぜ自分はこのようなことをしてしまうのか、と困惑してしまいます。

自分の内に起きている戦いを認識するには、私たちにもたらされているいのちを完全に体験するために、今何をすべきかを知る必要があります。ダラス・ウィラードは「鍛錬の精神(The Spirit of the Disciplines)」の中で、この戦いと解決について次のように述べています。「...私たちは自分自身に意識して命じることができることよりも、もっと多くのことを抱えていることに、やがて気づくのである。自分自身を見つめ、自分の「すべて」を神のみことごととご性質と調和させることがいかに困難なことであるか見出すのである。しかし、私たちがそのためにより多くの恵みを受け取るとき、自分のすべてを神と調和させることは、「神に」していただくことではないということ、経験を通して学ぶのである。「私たちが」行動を起こさなければならないのである。」¹⁰

その行動には、特定のライフスタイルを選ぶことが含まれます。つまり、ますますイエス様を知り、イエス様を愛し、イエス様とともに歩むことができるように、イエス様との関係を意識的に深める生き方を選ぶのです。するとイエス様は、私たちとの関係を通して、私たちがますます御国の原則にしたがって生きることができるように助けてくださいます。デイトリッヒ・ボンヘッファーはこのような生き方を「鍛錬された弟子の生き方」と呼びました。トム・ネルソンはそれを「イエス・キリストの弟子になること」と呼んでいます。

大命令(神と隣人を愛する; マタイ 22:36-40)と大宣教命令(行って、あらゆる国のの人たちを弟子とする; マタイ 28:18-20)との間に、ネルソンが「大いなる招待」と呼ぶ、イエス様のみことばがあります。マタイ 11:28-30 には、私たちはイエス様のくびきを負い、イエス様から学ぶようにと招かれています。「すべて、*疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。*」

イエス様は私たちにもくびきを負うように、イエス様の弟子となるようにと招いておられます。それは、どのようにクリスチャン生活を生きるべきか、**イエス様ご自身**が私たちに教えてくださるためです。くびきをともに負うことは、深い関係を意味し、私たちの生き方に改革をもたらします。しかし、どうすればイエス様とともにくびきを負い、イエス様とつながることができるのでしょうか。イエス様の弟子として生きる、あるいはイエス様に近づくためには、しばしば霊的な鍛錬を実践することが必要です。

ダラス・ウィラードはこう述べています。「正しく理解された霊的生活のための鍛錬とは、私たちが新しい人として肉に対する支配を高めていくために、意識的に時間をかけて取り組む活動である。そのような鍛錬は、私たちのからだにこびりついている罪の習慣の代わりに、神の御国の生き方を身に着けることを助けてくれる。」¹¹

イエス様はご自身の生活と働きにおいて、時には人々と関わり、時には人々から身をひく、というリズムを示されました。福音書には、群衆がイエス様に押し寄せ、イエス様が必要を抱えた人たちに仕えたことが頻りに記されていますが、その後、イエス様が人里離れた場所に行かれたことも書かれています。私たちもイエス様と同じように、日々の忙しさに直面しなければなりません。人々と関わる時と人々から身をひくというリズムを身に着けることはできます。

私たちが実践する霊的な鍛錬は、人々と関わることと人々から身をひくこと、というリズムと同じものなので、大きく 2

つに分類されます。一つは「人々のただ中における鍛錬」で、もう一つは「個人的な時間における鍛錬」です。個人的な時間における鍛錬とは、「祈り」、「断食」、「静寂」、「聖書の学び」など、日々の忙しい生活から離れて、個人的に靈性を養うことです。それに対して、公の場、あるいは日常生活の倍のいてなされる鍛錬もあります。それには「感謝」、「服従」、「模倣」などが含まれます。イエス様との歩みを深めるために実践することのできる鍛錬は無数にあります。ここでは、そのうちのいくつかを見ていきます。

人々のただ中における鍛錬: 日常生活における弟子の生き方

感謝をささげるという鍛錬

私たちはタクシーで杭州から上海へ向かっていましたが、私は後部座席で本を読んでいました。夫は赤ちゃんだった娘を抱っこしていました。二人とも眠っていました。早朝の空は、雲が立ち込め、冷たい雨が降っていました。私は車の窓に顔を向けていました。静かなひと時で、私は幸せを感じていました。

突然、何かが起きたことに気づきました。目を閉じていたわけではないのに、すべてが茶色にしか見えないのです。また何も聞こえません。まるで世界から全く断絶させられてしまったかのようでした。私はひっくり返り、空中を飛んでいるのを感じましたが、本当にそうなのか分かりませんでした。私は叫びました。でも本当に叫べたのでしょうか。私の言葉は唇から発せられたのでしょうか。それとも、単に心の中で「車が衝突したの？事故が起きたの？」と叫んだだけでしょうか。分かったことは、私は自分自身以外のすべての現実から完全に断絶させられてしまったということでした。ただ一つははっきりと分かったことは、神が良いお方であるということでした。タクシーの後部座席でひっくり返っていた私は、神のすばらしさを宣言し、この状況がどのような結果をもたらすかにかかわらず、感謝をささげました。

それから数分して目が覚めました。私は運転席と後部座席との間の仕切りに頭をもたげていました。運転手は意識不明の状態で横たわっていました。それから、娘の泣き声が聞こえました。夫は静かで、気づいていないようでした。「どうして？」と思いました。しかし私は体を動かさず、夫のほうを向くことができませんでした。「死んでしまったのかしら？」しかし、私は何もできませんでした。私自身もまたすぐに意識を失ってしまうだろうと感じたからです。イエス様のすばらしさのうちに、安息を得ることができると私は祈りました。この事故も「すべてのこと」の一つなので、私はもう一度神に感謝をささげました。もう一度目を覚ましたときにどうなっているかに関わらず、私は感謝にあふれていました。そして意識を失いました。

このような危機にあって、神を礼拝し、感謝をささげることができたことに、私はだれよりも驚きました。夫を失ったかもしれないと後で思い起こしたとき、私はゾッとしました。私が最も恐れていた状況に直面したとき、なぜ私は感謝をささげることができたのでしょうか。それは恵みでした。また、鍛錬でもありました。私は何年もの間、感謝をささげることを実践してきました。何年もの間、私は神のすばらしさを思い巡らしてきました。特に、ひどく失望し、心を痛め

たときに私のたましいは最も柔らかくされ、最も深いところで神のすばらしさを知り、感謝をささげてきました。信仰を越えたところで、経験を通して、神が本当にすばらしい方であることを知っていたのです。

この話は良い結末を迎えました。夫も、娘も、私もみな、大けがをすることなく、命が守られました。また、この事故は、感謝をささげることを決意し、鍛錬し続けることは、御国の民にとって、いのちをささげるほどに大切な習慣であることを私に思い起こさせてくれます。何年にもわたって感謝をささげることは、神の究極的なすばらしさへの深い確信を生み出しました。感謝をささげるようにとの命令と約束は、聖書全体を通して貫かれています。そのうちのいくつかを見てみましょう。

1 テサロニケ 5:16-17 にこう書かれています。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」

ピリピ 4:6-7 にこう書かれています。「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」

コロサイ 3:17 にこう書かれています。「あなたがたのすることは、ことばによると行いによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。」

感謝をささげるという鍛錬は実践するのに単純なことです。いつでも簡単にできる、ということでもありません。そのためには感謝をささげるという意志を固くし、私たちに何が起きても、すべて神のすばらしさからもたらされると受け入れることが必要です。墮落したこの世のために何が降りかかってくるとしても、それは神の究極的なすばらしさのゆえに、神が私たちに触れてくださっていることなのです。痛みを伴う状況において感謝をささげることは、神ご自身が創造された世界に介入されているという信仰を表すことです。それは、私たちが生きているこの世よりも神のほうが偉大であり、強い方であり、この世から神が手を引かれたのではないことを示します。私たちが経験する痛みは、私たち自身と他の人々の生活において、贖いをもたらすものなのです。

服従と模倣の鍛錬

福音書において、人々がイエス様のもとに来た理由はただ一つでした。彼らは自分の必要を満たしてもらいたかったのです。しかしイエス様は、表面的な解決よりももっと多くのものを私たちにもたらそうとされます。足のなえた人は歩きたいと願いましたが、イエス様は罪の赦しも与えられました。姦淫の現場でとらえられた女性には、「あなたの罪は赦されました。行きなさい。もう罪を犯してはいけません。」と言われました。しかし、私たちはどうすれば行って、もう罪を犯さないようにすることができるのでしょうか。この論文の第 1 章でみたように、自分の意志の力だけでは罪を克服することはできないのです。

私たちを変え、成長させてくださるのは神です。その変化を永続的なものにするために、私たちの意志の力は無力です。ですから、人生の変革には意志の力ではなく、神に服従することが重要なのです。では、服従するという鍛錬をどのように実践すればよいのでしょうか。

服従とは、感謝をささげることと同じように、日常生活の中で実践することです。私たちの意志と神のみこころとの間に衝突が起きていることに気づいたときに、神に私たちに支配していただくことです。単純なことですが、実践するのはいつも簡単とは言えません。服従は高慢な者に向かって「許可を求めるよりも、赦しを求めるほうがよい」と言うことな

のです。

1 サムエル 15:22 に書かれている全焼のいけにえや犠牲について考えてみましょう。それらは罪のためのいけにえですが、神は従順を求められます。「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」

服従の鍛錬は、模倣の鍛錬と密接に関連しています。それは、私たちの主の行いを模倣することは、この世の文化や墮落した自然界に逆らうものだからです。主を模倣するには、しばしば服従が必要とされます。そしてどちらも、この世の原則に支配されそうになるときに、御国の原則を選ぶようにと私たちを導きます。

イエス様が何を、どのようにされたかを理解せずに、模倣することはできません。模倣とは、単に行いだけでなく、キリストが抱いておられた態度を取り入れることなのです。ピリピ 2:5-8にこう書かれています。「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」

イエス様に似た者となるには、イエス様が私たちを見ておられるように、私たちも同じ視点でこの世と自分たちを見る必要があります。イエス様の考え方を自分の考え方とする必要があります。私たちの行いと考え方の両方について、ローマ 12:1-2にこう書かれています。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」

キリストを模倣するなら、私たちの行いと態度を神の愛に向ける必要があります。これは、聖アウグスティヌスが「私たちの愛を整える」と述べていることです。つまり、神が愛しているものを、神が愛しているように、神の愛の秩序にしたがって愛するのです。ロバート・ルイス・ウィルケンが「初代教会のクリスチャンの精神(The Spirit of Early Christian Thought)」の中で、徳のある生活を生きることについての聖アウグスティヌスの見方をこう述べています。「イエス様は『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ』と言われた。初代教会のクリスチャンにとって、道徳的な生活とは宗教的な生活、神の愛に沿った生活であった。その神の愛こそ、最初で最大の愛であり、他のすべての愛を動かす愛である。神を求め、神に従い、神にしがみつくことによるのみ、徳を身に着けることができるのである」¹²

ジーン・ガイオンはこう述べています。「神に自分の心のすべてをささげるとは、どういうことだろうか。それは、あなたのためしいのうちにあるすべてのエネルギーを、いつも神に向けていくことである。」¹³ 御国の原則にしたがって生きるには、私たちの愛を神の愛に向け、自分のすべてをもって神を愛する必要があります。それは、服従と模倣によって、ある部分、成し遂げることができます。

個人的な時間における鍛錬：人々から離れたときの弟子の生き方

ここでは、人々から離れて個人的な時間を取るときの鍛錬について簡単に見ていきます。内容の多くは、トム・ネルソンの「5つのなめらかな石(Five Smooth Stones)」を参照しています。

静寂の鍛錬: 一人で静まることは他のすべての霊的鍛錬の土台となります。それは、心を奪うようないかなるものからも離れ、さえぎられることのない神との時間です。

静寂は現代の忙しい生活から私たちを和らげてくれます。地球規模でつながっている大都市での生活には、ものすごい量の騒音があります。それは音によるものだけでなく、目から入ってくる「騒音」もあります。クラクションが鳴り響き、ネオンが点滅し、インターネットからメッセージが飛び込み、バスの側面には大きな広告があり、これらはみな私たちの心の奥にある部屋にまで侵入してきます。テクノロジーとは騒がしいものです。

静寂は他の人々との交際から私たちを離し、私たちに襲ってくる騒音を静めてくれます。しかしそれだけでなく、私たちのたましいのうちにある騒音をも静めてくれます。トム・ネルソンはこう述べています。「静寂の中に身を置くと、私たちは心のすべてを神にささげ、たましいの力をキリストに結びつけることに集中します。静寂の鍛錬を通して、私たちはただイエス様に自分のたましいを向けることに集中するのです。」¹⁴

イエス様は静寂のときを持つことの大切さを知っておられました。イエス様は公生涯を通じて、祈り、思索、安息のために、群衆から離れることを実践されました。公生涯を始めるにあたって、荒野に退かれ、誘惑に備えられました(マタイ 4:1-3)。また、一人になれる場所を何度も探し、弟子たちにもそうするように言われました(マタイ 14:23、マルコ 1:35、6:31、ルカ 4:42、5:16)。そして、公生涯の最後に、ゲツセマネの園で一人になり、十字架への備えをされました(マタイ 26:36)。

静寂の鍛錬には、意識的に計画し、実践する決意が必要です。もしこの大切な鍛錬を実践するのなら、時間と場所を見つける必要があります。その他の良い計画や行いも、スケジュールから外す必要があるのです。

祈りの鍛錬: 時々、罪悪感を抱くと、すぐに祈らないといけないと思うことがあります。しかし罪悪感が消えたなら、自分の至らなさに圧倒され、やがて人生とはつまらないものだと感じてしまいます。イエス様が私たちに祈るようにと言われたとき、主はこのようなことを期待しておられたのでしょうか。主は、これが天の父なる神とのコミュニケーションであると見ておられるのでしょうか。

祈りとは、神とクリスチャンとの間の継続的な、親密な会話です。祈りを神との会話であると考えたら、祈りについていくつか間違った考え方をしていることに気づかされます。しばしば私たちの祈りは、欲しいものを受け取ることや、置かれている状況を何らかの仕方に変えてもらうことを強調します。しかし祈りは、願い事をするというだけではありません。神に語りかけ、神のみ声を聞くことです。トム・ネルソンはこう書いています。「祈りには願うことが含まれるが、それは自分の欲しいものを具体的に手に入れることよりも、もっと多くのことが含まれる。祈りとは、私たちに変革をもたらす神との友情のことである。」¹⁵

祈りの鍛錬は、イエス様にとって優先事項でした。イエス様は一人になられたとき、イエス様は祈り、また、しばしば断食もされました。祈りにおけるイエス様の模範と、祈るようにとの私たちへの招きは、イエス様に従いたいと願う者の生活に示される特徴です。もしイエス様が父なる神との時間を必要としていたのなら、私たちはどれほど多くの時間、神と交わる必要があるのでしょうか。私たちは、自分のことは自分とする傾向がありますが、それは祈りによって神の助けを求めることと正反対です。しかし、私たちの生活において神を必要としていることは、自分の力で何とかするという見せかけの生き方よりも、はるかに現実的なことなのです。

断食の鍛錬: あらゆる霊的な鍛錬の中で、断食は最も悪用され得るものかもしれません。断食は霊的でない世界においてあまりにも見慣れないことなので、非常に聖い行いとして目立ち、そのため自分を義とする行いになりかねません。断食は霊的、あるいは宗教的な計略を達成するための方法であると受け取られる可能性もあります。あたかも、神に対する祈りに断食を加えるなら、神は私たちが思うように私たちの祈りに答える義務があるかのように考えてしまうのです。

断食の本当の目的は、私たちの計略を達成することではなく、私たちのうちに、また私たちを通して、神のご計画がなるように自分自身を神にささげることです。つまり、断食は物事を成し遂げるための方法ではなく、神とより親しい関係を持つためのものなのです。

西洋で著名なクリスチャン指導者であったウィリアム・ブライトは、人生の最後の数年間を、世界と彼の母国の人々のために祈り、断食することにささげました。彼は、教会の牧師たちが教会員を動員して国のために祈るように導くことを助けるための委員会を作りました。この働きを経済的に支えるために、彼は 1996 年に受賞したテンプルトン賞の賞金をすべてささげました。その額は 100 万ドル以上でした。ブライトは、霊的な断食の鍛錬が変革の力を解き放つことを理解していました。彼はこう書いています。「断食は聖霊が私たちのうちに大いなる働きをされるために、私たちの力を弱めるものである。」

イザヤ書には、断食を通して、内なる人、からだ、家族、社会全般など、様々なレベルで変革の力が解き放たれたことが書かれています。イザヤは断食が不義の鎖を解き、あらゆる種類のくびき(奴隷状態)、特に虐げられている人々を解き放つと述べています。断食は、私たちは貧しい人々や社会的に弱い立場の人々と関わることを助けてくれます。

以下の箇所は、断食の落とし穴と断食がもたらす結果について洞察を与えてくれます。イザヤ 58:3-11 を読み、断食がもたらす益と落とし穴とに注目してください。

「なぜ、私たちが断食したのに、あなたはご覧にならなかったのですか。私たちが身を戒めたのに、どうしてそれを認めてくださらないのですか。」

見よ。あなたがたは断食の日に自分の好むことをし、あなたがたの労働者をみな、圧迫する。見よ。あなたがたが断食をするのは、争いとけんかをするためであり、不法にこぶしを打ちつけるためだ。あなたがたは今、断食をしているが、あなたがたの声はいと高き所に届かない。わたしの好む断食、人が身を戒める日は、このようなものだろうか。葦のように頭を垂れ、荒布と灰を敷き広げることだけだろうか。これを、あなたがたは断食と呼び、主に喜ばれる日と呼ぶのか。

わたしの好む断食は、これではないか。悪のきずなを解き、くびきのなわめをほどこき、しいたげられた者たちを自由の身とし、すべてのくびきを砕くことではないか。飢えた者にはあなたのパンを分け与え、家のない貧しい人々を家に入れ、裸の人を見て、これに着せ、あなたの肉親の世話をすることではないか。そのとき、暁のようにあなたの光がさし、あなたの傷はすみやかにいやされる。あなたの義はあなたの前に進み、主の栄光が、あなたのしんがりとなる

れる。そのとき、あなたが呼ぶと、主は答え、あなたが叫ぶと、「わたしはここにいる」と仰せられる。

もし、あなたの中から、くびきを除き、うしろ指をさすことや、つまらないおしゃべりを除き、飢えた者に心を配り、悩む者の願いを満足させるなら、あなたの光は、やみの中に輝き上り、あなたの暗やみは、真昼のようになる。主は絶えず、あなたを導いて、焼けつく土地でも、あなたの思いを満ちし、あなたの骨を強くする。あなたは、潤された園のようになり、水のかれない源のようになる。

聖書の学びの鍛錬: 神を愛するには、神を知る必要があります。トム・ネルソンはこう書いています。「神を親しく愛するとは、心で経験するだけでなく、思いを働かせることでもある。イエス様の弟子たちとして、私たちは思いをも活発に用いるように招かれている。」¹⁶

イエス様は私たちに思いを尽くして主を愛するようと言われますが、それは私たちの思いを活発に働かせることが必要な信仰へと導いておられるということです。興味深いことに、旧約聖書に書かれている大命令には、思いを尽くして神を愛する、ということは含まれていません。イエス様のいのちとことばに基づいている新約聖書には、思いを働かせることについて様々な命令が書かれています。ペテロは読者たちに「思いを守りなさい」(1 ペテロ 1:13 英語訳の聖書より)と勧め、またパウロはテモテに対して「神に認められた者として自分を示すために学びなさい」(2 テモテ 2:15 英語訳の聖書より)と勧めています。

ネルソンは次のようにも述べています。「真のキリスト教は心だけでなく、思いをも変革する。ローマ 12:2 はこう教えている。『この世と調子を合わせるのではなく、あなたがたの思いを新しくすることによって変えられなさい』。」¹⁷(英語訳の聖書より)

神のみことばを学ぶことを通して、私たちは神を正しく知り、神を純粋に愛することに献身していきます。みことばを読み、学ぶことによって、みことばが私たちの思いに浸透し、神を正しく見る見方を身に着けます。そうすることによって、神を正しく愛し、神が本当にどのような方であるかを知ることができます。神の愛を知らなければ、神が愛されたように愛することはできません。ご自身を啓示された神について正しい知識がなければ、私たちはただ思いつきで神がどのような方であるかを推測することしかできません。

神についてのこのような知識は、聖書を読み、学び、思い巡らすことによるのみ、得ることができるのです。

第4章 新しいいのちの範囲

まとめ:

- 私たちに与えられた新しいいのちは永遠という範囲に及ぶので、私たちの今の世における行いは、現在と将来とにおいて、永遠の意義を持っている。

- すべてのクリスチャンがある緊張を体験している。つまり、私たちは生きることが不可能な、あるいはとても難しいいのちを生きるようにと造られたのである。

- 自分の内に起きている戦いを認識するには、私たちにもたらされるいのちを完全に体験するために、今何をすべきかを知る必要がある。

- イエス様は私たちにともにくびきを負うように、イエス様の弟子となるようにと招いておられます。それは、どのようにクリスチャン生活を生きるべきか、**イエス様ご自身が私たちに教えてくださるため**である。

- 霊的な鍛錬は、人々と関わることと人々から身をひくこと、というイエス様が実践された鍛錬のリズムと似ている。

まとめ

永遠のいのちは、私たちが神と交わるようになり、**神が私たちにご自身のいのちを注がれる**(活力)ときに与えられます。その結果、私たちは**今も、いつまでも**(範囲)、**神の御国の中で**(領域)生き、**御国の原則**(方向性)にしたがって**御国の責任**を果たします。

福音の輝かしい希望は、今も、いつまでも存在します。神が私たちの中に住んでくださり、今なお墮落した世にある私たち一人一人に、新しいいのち、新しい生き方を与えてくださるという約束が与えられています。

私たちが本来生きるように意図されているいのちには、相反するように見えるものや、複数の事柄が私たちに同時進行的に影響を与えるために、様々な側面があり、複雑です。それは約束と可能性に満ちていますが、時には多くの痛みを伴います。しかし、主の贖いのみわざはすべてにおいて機能しています。

霊的な領域には様々な逆説に満ちているので、それを十分に理解するには時間がかかります。この世のシステムと神の御国には全く異なった計画があります。そして、衝突する事柄は私たちの外側にのみ存在するものではありません。私たちが正しいことをしようと務め続ける中で、私たちの性質そのものが様々な目的をもったものであることに気づかされます。その衝突の中にあって私たちはきよめられています。しかし、そのきよめには「今とまだ」の側面があり、時に衝突します。これらのことすべてにあって、私たちは神の回復の計画の中に入れられ、喜びと希望をもって神の働きを行うことができ、イエス様を知る必要のある人々に新しいいのち、新しい生き方を提供しています。そして、私たちの希望は、やがてある幸いな日に、完全に実現するのです。

見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地を創造する。

先の事は思い出されず、心に上ることもない。

だから、わたしの創造するものを、いついつまでも楽しみ喜べ。

見よ。わたしはエルサレムを創造して喜びとし、

その民を楽しみとする。

わたしはエルサレムを喜び、わたしの民を楽しむ。

そこにはもう、

泣き声も叫び声も聞かれない。

イザヤ 65:17-19

新しいいのちの福音

- 1 The Call, Chapter 4, page 29
- 2 A.W.トウザー, *The Pursuit of Man*, Christian Publications Inc., Camp Hill, PA, 1978, page 100.
- 3 ボンフェッファー
- 4 Dallas Willard, *The Spirit Of The Disciplines*, HarperSanFrancisco, San Francisco, CA, 1988, page 28
- 5 Barnes' Notes, Electronic Database, Copyright © 1997 by Biblesoft
- 6 この箇所を示した概念は、*The Missional Church*, Tim Keller, June 2001 を参照した
- 7 Meditation in a Tool Shed, C.S.ルイス, Coventry Evening Telegraph, July 1945
- 8 The American Heritage Dictionary, American Heritage Publishing Co., New York, NY, 1969, life を参照
- 9 トム・ネルソン, *Five Smooth Stones*, Cross Training Publishing, Grand Island, NE, 2001 page 53
- 10 *The Spirit Of The Disciplines*, Page 68
- 11 *The Spirit Of The Disciplines*, Chapter 6 Page 86
- 12 ロバート・ルイス・ウイルケン *The Spirit Of Early Christian Thought*, Yale University, USA, 2003, Page 289
- 13 ジーン・ガイヨン, *Experiencing the Depth of Jesus Christ*, Seedsowers Publishing, Jacksonville, FL, Page 108
- 14 *Five Smooth Stones*, Page 78 and 90
- 15 *Five Smooth Stones*, Page 101
- 16 *Five Smooth Stones*, Page 119
- 17 *Five Smooth Stones*, Page 122